

A September 2019 Report regarding a number of Villages in Tianjin and Shanxi Province in northern China (15)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Benno, Saiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058176

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



華北農村訪問調査報告(15)

—— 2019年9月、山西省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

2019年9月1日(日)～12日(木)の11泊12日の日程で中国山西省農村を訪問して聞き取り調査を行った後、甘肅省敦煌市を訪問した¹⁾。今回の山西省農村における聞き取り調査への参加者は、年齢順に弁納才一・祁建民・陳鳳・古泉達矢・佐藤淳平の計5人である。そのやや詳しい旅程は、以下のとおりである。研究代表者の筆者の旅程を代表例として示しておきたい。

9月1日(日)、羽田空港(NH963, 17:20)から北京空港(20:10)へ移動し、翌2日の移動に備えて北京空港の近くのホテルに1泊した。翌2日(月)、北京空港(MU5295, 10:00)から太原武宿空港(11:15)へ移動し、すでに前日に太原に到着していた祁建民が借り上げた車に乗ってL県へ移動してL県のホテルに3泊した。3日(火)、H市とH県に跨がる四社五村のうちの1ヶ村であるH市Y村を訪問して聞き取り調査を行った。4日(水)は、終日、D鎮J村を訪問して聞き取り調査を行った。5日(木)、午前中はL県J鎮J村の書記などの幹部に挨拶をした後、同村の老幹部に元々のJ村を案内していただいた。同日午後、借り上げた車でL県から太原市に戻って1泊した。6日(金)、借り上げた車で太原市からJ県D村へ移動し、午後、D村で聞き取り調査を行った。7日(土)、午前中はD村で聞き取り調査を行い、午後、D村から太原市へ戻り、太原武宿空港(MU5527, 15:30)から北京空港(16:45)へ移動して1泊した。8日(日)、弁納と古泉の2人だけが北京空港(CA1287, 6:40)から敦煌空港(10:10)へ移動して2泊した。9日(月)、午前中は敦煌市政府政協弁才室を訪問し、同日昼に陳

鳳らと再度合流し、同日午後は莫高窟と鳴沙山月牙泉を参観した。10日(火)、敦煌空港(CA1288, 11:00)から北京空港(13:55)へ戻り、北京市内のホテルに2泊した。11日(水)、ホテルにおいて訪問聞き取り調査の内容を整理した。12日(木)、北京空港(NH964, 8:35)から羽田空港(12:50)へ移動して帰国した。

ところで、当初、中国西北地域における水利と農村社会の関わりに対して強い関心を持っている内山雅生の要望に従って、甘粛省敦煌市の近郊農村(敦煌市転渠口鎮の「新農村」、棉花・葡萄生産地)も訪問する予定だったが、訪中直前になって内山が自らの家庭の事情で今回の中国農村訪問調査には全く参加することができなくなってしまった上に、敦煌市近郊農村を案内する予定だった祁建民が大学の校務のために、今回の旅程の途中で日本へ戻らなければならなくなり、今回は敦煌市近郊農村を訪問することはできなくなった。そこで、筆者と古泉の2人は、敦煌市近郊農村を訪問する代わりに、敦煌市政府政治協商委員会を訪ねて地方誌史や文史資料などの文献資料を調査するとともに、地域経済の現況について尋ねることにした。

なお、本稿でも、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として算用数字と常用漢字を用いるとともに、敬称を略すことにした。また、個人のプライバシー保護の観点から、訪問した農村における聞き取り調査にかかわる人名・地名・固有名詞などについては基本的に伏せることにした。

I. 聞き取り調査

(1) 山西省H市Y村

聞き取り対象者：WBH

聞き取り日時：2019年9月3日(火) 9:55～11:30

聞き取り場所：Y村霞霞農資部(写真1を参照)

案内者：張愛国

聞き手：弁納才一・祁建民・古泉達矢・佐藤淳平

通訳：祁建民



写真1. 霞霞農資部

化学肥料販売店(霞霞農資部)

- ・WBHは、我々が前回(2018年9月)まで訪問してきた居住地(四社五村の水源地に近い供水ステーション「Y集中供水管理站」)からは遠く離れたY村の中心地(後述の定期市が開かれる場所の近く)で2019年2月15日から林檎栽培用の化学肥料(有機肥料)販売店「霞霞農資部」の営業を開始したという。化学肥料の売買は全てQRコードを利用したスマホによる決済となっていた。また、同販売店の名前の中の一文字はWBHの妻の名前から取ったという。
- ・同販売店は、もともと親戚の人が経営していたレストランだったところを賃貸契約(年間の賃貸料は7,000元)し、同店舗前を増改築して買い付けた化学肥料を保管する場所として利用している(写真2を参照)。そのために、同店舗内には壁に掛けられた大きな温度計兼時計や受付カウンターなどレストランだった頃の名残と思われるものがいくつか見られた。しかも、今回の訪問聞き取り調査時には妻も臨席し、また、元々の受付カウンターだったところには小学生の娘の教科書らしき本が数冊置いてあったので、2019

年9月現在は居住地も兼ねていると思われる。



写真2. 山積みされた化学肥料

- ・ 同店舗の化学肥料は、山西省西南部の運城市や侯馬市にある企業(山西壘農化肥有限公司・運城市喜耕田農業科技有限公司)から仕入れている。そもそも、その企業が本村まで販売宣伝にやってきて、その仕入れ価格が他社よりも安価だったので、購入することにした。また、その企業は林檎に被せる紙袋も合わせて販売している(1箱につき3,000枚、1枚当たり0.05元)。もとより、運城は林檎の「栽培基地」になっていて、林檎の栽培が盛んなところであるという。
- ・ 今後は、農薬も販売したいと考えているという。だが、その農薬を販売するためにはH市農業局から販売許可をもらう必要があり、さらに、その販売許可をもらうためにはH市農業局が開催する講習会に参加する必要があるという。しかも、受講料を支払う必要がある。もとより、農薬は劇物であることから、政府としては安全管理などを指導する必要があるからであろう。

林檎栽培

- ・2019年9月現在、本村には林檎栽培用の化学肥料販売店を経営する家がWBHを含めて3戸いる。
- ・本村では、総戸数約260戸のうち約80戸が林檎を栽培している。林檎の栽培に従事している人は1970年代生まれの者(40歳代)が多い。これに対して、1980年代以降に生まれた比較的若い人は農業には従事せず、村外に働きに出ている。
- ・本村で栽培されている林檎は、10月に収穫される「紅富士」と中秋節(2019年は9月13日)の前(8月)に収穫される早熟の「嘎啦」の2品種である。
- ・通常、林檎の販売価格は30斤(15kg)当たり5元である。林檎の販売価格は5～6月に最も高くなる。内モンゴル自治区や山西省北部の大同からリンゴを買い付けるために本村に買付人がやってくる。
- ・林檎の袋懸け作業や収穫などの繁忙期には人を雇って作業を行う。このような農業労働者は本村周辺の村々からやってくる。農業労働者の賃金は1日当たり80元である。だが、リンゴの袋かけの作業は出来高払いとなっていることから、1日当たり最高で200元が支払われる人もいる。

家畜と家禽

- ・本村には、養豚農家が3戸、羊の飼育農家が2戸、養鶏農家が1戸(約2,000羽の鶏を飼育)いる。普通の鶏卵は1斤(8～10個)当たり3～5元だが、土鶏卵は1斤当たり10元である。このことは、良質な鶏卵がより高価格で購入されるようになっていることを反映している。

赶集

- ・本村では、毎月、農曆(旧暦)の2日・5日・8日・12日・15日・18日・22日・25日・28日に「赶集」(定期市)が開かれる。当日の9月3日は、農曆では5日にあたっていたために、定期市が開かれていた。
- ・本村の定期市には売り買いするために本村周辺の20～30の村々から人々が集まっているが、隣接するH県内の農村からやってくる人が最も多いという。実際、当日、定期市を案内してくれたWBHを介して市場で商品を買

ている人に出身地を聞いてみると、本村に近いH県の農村(具体的な村名は不詳)から来たと答えていた。また、その定期市の出店者は中高年の女性が多かった。

- ・本村内にはすでに数多くの商店があり、日常生活に必要なものは基本的には全て販売しているように見える。だが、それにも関わらず、このような定期市に出店している露天商(農民)の商品が販売されているのは同村内の商店よりも廉価であることによると考えられる。ちなみに、当日(9月3日)、定期市では、食糧穀物、加工食品、種子、薬草、漢方薬、香辛料、乾物、果物、ドライフルーツ、野菜、農具、衣料品、農産物加工品、玩具、雑貨など、実に多種多様な商品が売られていた。そして、その露店の売買取引では天秤ばかりの計り売りで現金取引をする露店もあったが、ほとんどの露店ではやはりQRコードを利用したスマホによる決済となっていた。

水利

- ・2019年春に行われた四社五村の小祭・大祭の主催村はX村だった。2019年は全ての村が小祭・大祭に参加した。だが、2019年現在、水を利用しているのは、C社から給水を受けているX村(社)、L社から給水を受けているY村(社)、分水嶺からの水を直接使用しているK村の「二社三村」にまで減ってしまった。
- ・2019年現在、H市内の水道管にかかわる修理費用はH市水利局が負担することになっている(もともとは国家からH市政府へ支給)。ただし、行政上、X村はH県に属しているので、C社からH県との県境まではH市水利局が水道管の修理費用を負担しているが、H県内の水道管の修理費用はH県水利局が負担している。よって、四社五村では小祭・大祭の費用(6,000~7,000元)のみを負担することになった。なお、今回(2019年9月)の四社五村の水利に関する聞き取り内容については、祁建民が詳細に整理することになっている²⁾。

村長

- ・最近、「打黒」(幹部の不正行為に対する徹底的な追求)運動が展開される中

で、Y村の村長が不正行為によって逮捕されてしまった。このために、2019年9月現在、Y村の村長は不在になっている。

- ・WBHは、Y村の村長になることを勧められたが、いろいろと口実を設けて追求されるのが煩わしいので、辞退したという。

(2) 山西省H市D鎮J村

聞き取り対象者：LHY (村書記)・LJX (村長・主任)・

LHM (文化・歴史担当)・LJX (元H市県志編纂室委員)・

LJJ (元H市一中校長)・LB (元H市煤炭集団工会主席)・

LCP (元H市煤炭集団信息処長)・LYH (H市城建局幹部)

聞き取り日時：2019年9月4日(水) 9:35~11:30

聞き取り場所：J村村民委員会

案 内 者：張愛国

聞 き 手：弁納才一・祁建民・古泉達矢・佐藤淳平

通 訳：祁建民

J村の概況

- ・J村は、元々はJ姓の村だったが、七里峪村からL姓がやって来て、2019年現在ではJ姓の家は1戸もいなくなってしまった。
- ・本村では、1960年から1962年までの「3年困難期」に餓死者は1人もいなかった。たしかに、当時は、本村でも食糧が不足していたが、「粗糧」(玉蜀黍、「莜麵」(燕麥))が配給されていた。なお、その当時、河南省から難民の一家族(介姓)が本村にやって来て2019年現在に至っている。周辺の村々にも河南省や山東省から難民がやって来たという。
- ・本村にはかつて生産小隊が5隊あった。だが、2019年現在はそれが5組の村民小組に改組されている。
- ・本村は、2019年現在、総人口が約1,820人、総戸数が約520戸、共産党員が52人、総耕地面積が約1,500畝、村民1人当たりの平均年収が約15,000元である。
- ・本村民の主要な収入源は、出稼ぎやH市街地などにおける商売である。た

だし、若い人は、単身で山東省(とりわけ青島市の機械製造工場)へ賃金労働者として働きに行く者が多く、最も遠いところでは広東省関東(「東莞」の誤りか?)の工場で働いている者もいる。一方、50~60歳代の中老年層にはH市街地で雑業に従事する者が多いという。そもそも、本村から青島市への出稼ぎが多いのは、かつて青島市へ働きに行っていた人からの紹介があったからである。

- ・本村内にある約1,500畝の耕地のうち、約500畝に材木用の木を植え、灌漑地の約1,000畝には2年前から「文冠果」を栽培している。土地が肥沃ではなく、蔬菜の栽培には適さず、玉蜀黍の栽培は少なく、大豆・粟・高粱などは栽培していない。また、かつては冬小麦を栽培していたが、2019年現在は全く栽培していない。文冠果は、植えてから収穫するまでに5年もかかるが、その葉がお茶となり、その実は食用油となり、質の良い高級な油は1斤当たり800円で販売することができる。大豆油が1斤当たり数十元なので、かなり収益性が高い。
- ・媯皇聖廟は、すでに2006年には国家(中央政府)が1,000万元を投じて修復されたという。
- ・2015年に山西省政府によって本村は「美麗宜居示範村」に認定され、2018年には「国家級伝統古村」となった。また、本村は、「H市歴史文化名村」の1ヶ村にも認定されている。
- ・最近、本村は、臨汾市(H市は臨汾市に属している)の「文明村」となり、また、本村の党支部は臨汾市あるいはH市の「先進党支部」にも認定されたという。
- ・かつては石炭によって暖を取っていたが、現在はH市からパイプを通して温水が送られて暖房としている。
- ・家族経営で「年飧饅」(春節の前に食べる饅頭、「状元饅」)を生産する合作社がある。また、十数戸が家庭で「年饅」を作っている。
- ・2019年9月現在、L氏宗祠も修復中であるという(後掲の写真6に見えるように、L氏宗祠の外壁の修理はすでに終了していた)。なお、L氏宗祠は文化大革命中も破壊されることはなかった。L氏宗祠の内部には「神祇」³⁾(先祖の名前が書かれた紙)が貼られている。

文冠果有限公司

- ・本村の灌漑地である約1,000畝の耕地は、H市にある文冠果有限公司に1畝当たり50円で貸している(「土地流転」)。同企業は、H市内で合計5,000畝の耕地を借りて「文冠果」を生産している。本村では、60歳前後の女性20人くらいが同企業で農業労働者として働いている。1人当たりの日当は50円である。

新農村建設

- ・本村は、2006年に「新農示範村」(「新農村」のモデル村)となり、「四化」と「四改」が実施された。「四化」とは「硬化」(道路の舗装化)・「緑化」・「亮化」(街灯の設置)・「美化」であり、一方、「四改」とは「改厨」(石炭や練炭を使用する竈から天然ガスを使用するガスレンジへの交換)・「改廁」(水洗トイレ化)・「改圈」(畜糞の適正処理)・「改水」(上水道の整備)である。なお、2019年現在、本村では家畜はほとんどいなくなった。
- ・本村でも「城郷一体化」(農村の都市化)が進行し、このように都市化が進行した農村は「小区」と呼ばれるようになっている。

水利と稲作

- ・H市では、これまでたくさんの井戸が掘られた。その中には深さが約600mに及ぶものもあった。また、井戸水を汲みすぎて地盤沈下したところもあった。
- ・かつては湧水が豊富で、水稲作も行われていた。だが、その後、水が枯渇したために、水稲作を続けることができなくなった。水稲作をしていた頃は、米は小麦より約2倍も高く売ることができた。そのため、本村民は米を全て小麦と交換して米を食べることはなかった。

『J村志』編纂

- ・2007年から『J村志』の編纂作業が始まった。主編者は、当時、H市県志編纂室委員を務めていたLJXだった。LJXは、9月4日午前顔を出していたが、今回は詳しい話を聞くことはできなかった。今回は、是非とも話を聞くべき重要人物である。編著者は計20人の本村人で、当時、最高齢者は82歳の

人(故人)で、最も若かった人はLHMだった。

- ・2013年から『J村志』の草稿を書き始めて、2014年10月に刊行された。こうして『J村志』は、文字数が100万字以上にも上り、掲載された写真は数千枚にも達した。これらの資料の一部は2019年現在でも本村民委員会に保存されている。

(3) 山西省H市D鎮J村

聞き取り対象者：LB・LXM(写真3を参照)

聞き取り日時：2019年9月4日(水) 15:15～16:35

聞き取り場所：J村村民委員会

案内者：張愛国

聞き手：弁納才一・祁建民・古泉達矢・佐藤淳平

通訳：祁建民

LBの個人史

- ・1946年7月28日(農曆、戌年)に生まれた。1954年に小学校に入学して5年間学んだ。1958年に「完全小学」に入学して2年間学んだ。
- ・1960年に西村の初級中学に入学し、1963年にH市の高級中学(高校)に入学した。同学校内の宿舎に住んでいた。この時期は「3年困難期」(1960～1962年)にあっていたが、学校には「粗糧」(玉蜀黍、高粱)と「細糧」(小麦、米)が60%と40%の割合で配給されていたので、本村よりも食糧事情はよかった。
- ・1966年に「高中」(高級中学すなわち高校)を卒業したが、文化大革命が始まったので、大学に進学することができず、1968年になってようやく高級中学の卒業が正式に認められた。こうして、1966年に本村に戻ってきて、第3生産小隊に入隊し、農作業に従事した。
- ・1968年(23歳)に結婚し、その年から小学校で民辦教師として1年間働き、音楽と体育を教えた。
- ・1971年から炭鋳労働者として2年間働き、1973年からH市の炭鋳(本村から約5里(2.5km)離れた国営の「聖仏鋳」)の「工会」(労働組合)で働いた。最初

は秘書となり、後に主席になった。給料は高かった。一時期、炭鉱の宿舎(非常に広かった)に住んだこともあったが、自宅から自転車で約30分かけて通勤した。

- ・2006年に退職し、本村に戻ってきた。2019年現在、かつて私(LB)が住んでいた炭鉱の宿舎には息子家族が住んでいる。最近、山西省内の炭鉱は統合が進んでいる。



写真3. LBとLXM

LBの家族史

- ・祖父母のことは、直接話をしたこともなかったので、全く知らない。
- ・父(LMT, 未年生まれ)は、文盲で、土地改革時期には3畝の土地を所有しており、「中農」とされ、76歳で死去した。
- ・母(GYZ, 巳年生まれ)は、本村から約10里(5 km)離れたY村の出身で、少し字を読むことができた。Y村は本村より土地が肥沃で豊かだった。母は76歳で死去した。

- ・妻(XRM)は、本村から約10里(5km)離れたB村の出身で、私(LB)より1歳年下だが、初級中学の時のクラスメートだった。B村は、本村より貧しかったが、H市一帯では平均的な村だった。
- ・私(LB)には3人の子供がいる。長女(54歳)はJ県城の企業で働いていたが、その後、その企業は倒産してしまった。次女と長男は「炭鉱局」で公務員として働いている。
- ・54歳の長女には息子と娘の2人の子供がいる。息子は北京の中国農業大学を卒業した後、人民解放軍に入隊した。また、娘は北京交通大学を卒業した後、南開大学大学院数学研究科に進学した。

LXMの個人史

- ・1946年9月7日(農曆, 戌年)に生まれた。LBとは同い年で、小学校から高校までずっと同級生だった。1966年にH市の高級中学(高校)を卒業したが、文革が始まったので、大学に進学することができず、本村に戻ってきた。第4生産小隊に入隊し、農作業に従事した。
- ・1969年に結婚し、その年から小学校の教員(民辦教師)として5年間働いた。その学校では、「数学」(算数か)とロシア語などを教えた。
- ・1973年に本村の共産党青年団書記となり、2~3年後には副書記となった。生産隊では耕作用トラクター(耕運機?)を運転した。
- ・1979年に村長になり、1989年まで務めた。1989年には再び副書記となり、1996年(50歳)まで務めた。
- ・1996年に本村の副書記を辞めた後、霍州市内にあるレストラン(20卓のテーブルを擁する)の「大堂經理」になった。そのレストランのオーナー(「老板」)は本村出身の人だった。
- ・2008年(62歳)、本村に戻ってきて本村内の「団地」の不動産屋で「会計」を務めるようになり、2019年現在に至っている。

LXMの家族史

- ・祖父とは直接会話した記憶がないし、周りの人からも祖父について話を聞いたことも無かったので、祖父のことに関しては全く知らない。また、祖

- 母は、H城内の出身だったが、文盲だった。祖母は、私(LXM)が19歳の時に85歳で亡くなった。なお、祖母ともほとんど話をしたことがなかった。
- ・父(LSD, 未年生まれ)は、少しだけ字を読むことができた。土地改革の時にわずか1畝の土地しか所有していなかったため、「下中農」(下層中農)と階級区分された。土地改革前は、蕎麦を買って粉にして「碗秃」(蕎麦粉をこねて作った食べ物)を作って近隣の村々で売っていた。解放後は、本村で最初に結成された互助組の組員になり、初級合作社の社長を務め、その後、人民公社の生産大隊では一貫して「保管」を務めた。父は、1982年(64歳)に死去した。
 - ・母(CHZ, 卯年生まれ)は、本村から約30里(15km)離れたY村の出身で、文盲だった。Y村は本村よりも小規模な山村だった。母は、1993年(67歳)に死去した。
 - ・妻(XQM)は、2歳年下で、本村から約2里(1km)離れたX村の出身で、本村の「媒人」(ちょっとした手数料をもらう仲人役の人)に紹介されて結婚した。X村は、本村よりも大きかったが、経済水準は本村とほぼ同じ程度だった。
 - ・2人の子供がいる。長男は山西省内の長治市の発電所に勤務している。長女は、元々、H市内の企業に勤めていたが、その企業が倒産し、夫も死去してしまったために、本村に戻ってきた。

(4) 山西省呂梁市J県X鎮D村

1) 村の新旧幹部

聞き取り対象者：RYR(元村長)・LBS(村副書記)

聞き取り日時：2019年9月6日(金) 14:20~15:00

聞き取り場所：D村村民委員会

聞き手：弁納才一・祁建民・陳鳳・佐藤淳平

通訳：陳鳳

D村の概況

- ・本村では、元々は水稲作の歴史はなかった。だが、1975年から4年間、約

- 3,000畝のアルカリ土質の土地を改良するために、水稻を栽培した。ところが、やがて水が不足するようになって稲を栽培することができなくなった。
- ・本村では、生産請負制が始まると、1980年代後半には3,000万トンの糧食を国家に納める必要があった。
 - ・2003年以降、本村でも「城郷一体化」（都市と農村の一体化すなわち農村の都市化）が急速に進行した。
 - ・2019年現在、若者の「離農」が進行し、農業(主に玉蜀黍の栽培)に従事しているのは40歳代以上の人である。
 - ・1990年代以降、本村民の経営する個人企業が増加するとともに、外来の企業が本村に流入してきたことによって、本村の農民の収入も増加するようになった。
 - ・本村の1人当たりの平均年収は約3万元である(多い人は年収が6~7万元にも達している)。このうち、本村内に設立された工場や企業からの給料が全収入の約7割を占めている。
 - ・RYR(元村長)は、あくまで個人的な考えであるとしながら、近年、本村内に設立された工場や企業で働くことができるようになったので、村外に出て行った若者もやがて本村に帰ってくるのではないかと考えているという。また、農業については、個人経営から合作経営すなわち農業経営の集約化を推し進めることによって生産高の上昇を図る必要があると力説していた。

なお、最後に、李副書記から、現在の日本における農業経済の発展や家庭ゴミの分別収集の状況について質問があった。とりわけ、中国政府が新農村建設運動において農村の「美化」を推進しているからであろうか、家庭ゴミの処理については非常に強い関心を持っていたように感じられた。これに対して、筆者は、現住している金沢市を事例として家庭ゴミの分別収集の日時(曜日と収集時間)やゴミの分別方法などについて簡単に説明した。ちなみに、2019年3月末に師範大学の張文明に案内していただいて華東浙江省嘉興市秀洲区新塍鎮の農村(家庭ゴミの分別収集をしていたモデル村)を参観した時も、同鎮の幹部から日本における家庭ごみの分別処理の状況に関する質問を受けた⁴⁾。

2) 村外労働経験者

聞き取り対象者：LBZ(写真4を参照)

聞き取り日時：2019年9月6日(金) 15:00～16:55

聞き取り場所：D村村民委員会

聞き手：弁納才一・陳鳳

通訳：陳鳳



写真4. LBZ

LBZの個人史

- ・1942年1月7日(午年)に生まれた。1950年にD村の「完全小学」に入学して7年間学んだ。ただし、1年目は「幼稚班」だった、1年生から4年生までは「語文」「算数」、5年生と6年生は地理・歴史、3年生から6年生までは美術、1年生から6年生までは音楽・体育の科目があった。算数・歴史・美術の授業が楽しかった。「語文」の先生(YAQ, 女性)は本村人だったが、算数の先生(QSL)は本村外の出身者だった。小学校は観音廟のところに

あった。

- ・ 太谷市の薬材公司以「会計」を努めていた父が国民党政府時代に閩長をやっていたこともあったことから、解放後、父は「反革命分子」として批判された。そのために、その息子である私(LBZ)は、1956年に小学校を卒業したが、中学校には進学することができなかった。
- ・ 1956年夏、初級合作社に入社して農作業に従事した。ただし、初級合作社からの手当は少なかったので、こっそりと蔬菜(トマトなどの夏野菜や甜瓜・香瓜など)を栽培して中古の自転車(自分で修理した)で他の村へ売りに行った。
- ・ 1966年、文化大革命が始まると、供銷社を建てるために、「泥瓦工」(左官)として第9生産小隊(生産小隊長はLJL)から建設現場へ派遣された。当時、本村には全部で16の生産小隊があった。
- ・ 1971年、16の生産小隊が8つの生産小隊に再編され、第7生産小隊(生産小隊長はLJL)に配属された。第7生産小隊には100戸余り(1戸当たりの家族人数は平均4人)が参加していた。1971年は1年間だけ第7生産小隊の小組長を務めた。なお、「小組」がいかなる組織なのかは不明であり、次回、確認する必要がある。
- ・ 1972年から第7生産小隊「工程隊」の「負責人」(責任者)として約20人(「工程隊」に参加した人は本村全体では約80人だった)を率いて春節明けから清明節頃までの寒い時期や秋の収穫後から春節前までの農閑期に太原市の工場建設工事を始めとして本村の内外で一般の家屋の建築に関わった。当時、本村には煉瓦工場があったが、冬季の寒い時期には煉瓦作りの作業ができなかったので、「工作隊」として村外へ働きに行った。また、生産小隊の隊員数が多く、生産小隊内では人手が余っていたので、冬季は「工程隊」隊員として村外で働くことになった。「工程隊」隊員が「泥瓦工」(左官)として働くと、一般の生産小隊の隊員よりも手当が多かった。
- ・ 1982年末、土地が再分配され、生産請負制が始まった。土地の再分配は、1人当たり「口糧地」1畝と労働力人数(18歳~60歳)に応じて男性2畝・女性1畝(2000年から男女の別なく1人当たり1畝に変更)とされていた。当時、我が家は4人家族で、労働力人数は3人だったので、計8畝の土地が

分配された。ただし、私(LBZ)は農作業に従事するよりも収益の大きかった「泥瓦工」(左官)の仕事をしていたので、私の農地も含めて農作業は息子に任せていた。

- ・生産を請け負った8畝の土地には玉蜀黍と高粱を栽培したが、玉蜀黍を売って小麦粉を購入して自家消費していた。食糧は十分に足りるようになった。かつて自留地に小麦を栽培したこともあったが、1983年以降は、小麦の栽培は手間暇がかかるので栽培しなくなった。
- ・「工程隊」の仕事は、1983年までは生産小隊からの請負だったので、収益の分配は生産小隊が6割、「工程隊」が4割となっていた。だが、1983年以降は個人経営となったために、収益を全て手に入れることができたので、収入が倍増した。
- ・1993年、「工程隊」を解散して元村長のRYRの工場では工場建設などに従事したが、手当は日払いだったので、収入は少なかった。
- ・1997年、再び「工程隊」を結成して「負責人」(責任者)に復帰した。この「工程隊」にはかつての「工程隊」のメンバーの他に新たに参加した人もいた。だが、1998年に「工程隊」の「負責人」を辞めると、翌1999年には「工程隊」の隊員は4～5人になってしまった。
- ・1999年に「第7生産小隊長」(第7区長)となり、村民委員会からの委託を受けて様々な任務を担当した。例えば、福利厚生事業として、毎年、春節・廟会(旧暦4月10日)・中秋節の時に55歳以上の女性と60歳以上の男性に対して1人当たり小麦粉25kg・米(ジャポニカ種)5kg・菜種油2.5%と春節の時に豚肉1kgを配給している。また、各農家から播種用の種子と肥料の必要量を聞いて代金を徴収して統計資料を作成して村民委員会に報告している。

なお、上記の筆者らによる聞き取り調査と並行して祁建民・佐藤淳平による聞き取り調査が行われていた⁵⁾。

(5) 山西省J県D村

聞き取り対象者：LBZ

聞き取り日時：2019年9月7日(土) 9:05～10:55

聞き取り場所：D村村民委員会

聞き手：弁納才一・陳鳳

通訳：陳鳳

LBZの家族史

- ・曾祖父(LJF)は4人兄弟の四男で、長男と次男の名前は知らないが、三男はLJFだった。長男の息子はLJXianで、次男には子供がなかったので、次男の一家は断絶してしまった。三男の息子はLJXiuである。曾祖父は本村で生まれたが、本村に妻(曾祖母)や子供(祖父)を残して商売をするためにいつも東北部へ出かけていた。
- ・祖父(LJZ、巳年生まれ)は、清代(毛沢東と同じ年)に中国の東北部で生まれた。曾祖父と同様に、東北部で商売をしていたので、全く農業には従事したことはなかった。本村で30畝の土地を購入したが、その農地は短工を雇って耕作させていた。その後(時期は不詳)、東北部から難(満州事変すなわち9・18事変のことだろうか)を逃れて山西省に戻ってきて、婁煩県で雑貨店を経営した。第一次国共内戦の影響を受けて商売をやめて本村に戻ってきた。1966年に70歳代で死去した。祖父と祖母はともにアヘンを吸っていた。
- ・祖父は2人兄弟だったが、兄(LJS)と仲が悪くなって、けんか別れした。その後、兄のLJSは博打で財産を失ってしまい、夫婦ともどもアヘンを吸っていた。
- ・祖父の1人息子である私の父(LRJ)とLJSの息子とは仲がよかった。LJSの息子が悪事をはたらいて投獄された時に、父(LRJ)が監獄から救い出した(保釈金を支払ったのであろう)。なお、解放後、本村に「禁煙」所が設けられて、本村のアヘン吸引者を集めてリハビリが実施された。
- ・祖母(YDE、祖父より9歳年下の丑年生まれ)は、本村より約12里(6km)離れたD村(本村よりもやや小さな村)の出身で、文盲だった。祖母の兄弟た

ちは東北部で商売をしていた。祖母は86歳で死去した。

- ・曾祖父の4人兄弟のうち、長男の子供(LJX)と四男の子供である祖父(LJZ)が共同出資して本村で「吉盛茂」という「木匠舗」(木工家具の製造・販売店)を開店し、遠い親戚のLJXに経営させていた。その店舗では本村の内外からやって来た「小工」(見習い工)を含む十数人の「木匠」(木工家具職人)が働いていた。
- ・父(LRJ, 1918年の午年生まれ)は、学校で学んだことがあると思うが、詳細はわからない。太谷市の薬材公司以「会計」をやっていた(前日の9月6日午後にも同じ話を聞いている)。そして、「三反五反」運動の時に、「反革命分子」として批判されて太谷市で投獄された(1956~58年)。1959年には本村に戻ってきて、合作社に入社して農作業に従事した。1970年代になって名誉を回復した。2006年に88歳で死去した。
- ・母(LCX, 1918年の午年生まれ)は、本村から約2里(1km)離れたL(2つの生産小隊しかない小さな村)の出身で、文盲だった。母の実家は商売をしていた。母は、弟と妹の3人兄弟で、弟は学校で学び、その妻は教員だったが、2019年現在、93歳である。妹はZ村の裕福な家(おそらく商売人か)に嫁した。
- ・私(LBZ)は、姉・妹と2人の弟の計5人兄弟姉妹の長男である。6歳年上の姉(LAZ, 1936年の子年生まれ)は、「高小」(高級小学)まで6年間学び、卒業した後は合作社に入社し、本村から約7里(3.5km)離れたY村の漢方医に嫁した。妹(LAT, 1945年の酉年生まれ)は、「高小」まで6年間学び、自由恋愛で本村のW姓の農家に嫁した。上の弟(LBZ, 1948年の子年生まれ)は、「高中」(高級中学すなわち高校)を卒業した後、父(LRJ)が「反革命分子」として批判されたために、学業成績は優秀だったが、就職先を見つけることができず、本村内で農作業に従事することになった。下の弟(LBG, 1951年の卯年生まれ)は、「高小」(高級小学校)を卒業した後、本村内の合作社に入社した。

赶集

- ・本村では、毎月、農曆(旧暦)の9日・19日・29日に「赶集」(定期市)が開か

れている。かつては本村の周辺の村々では本村以外には定期市が開かれていなかったのに、朝から店を出していた。だが、最近は周辺の村でも定期市が立つようになったために、本村の定期市にやって来る人が減ったので、昼過ぎから店を出すようになった。ちなみに、我々がD村を訪問した9月7日はちょうど農曆の9日にあたっていたために、D村で定期市が開かれていた。

廟会

- ・本村では、旧暦4月10日に廟会が開かれる。この廟会にかかわる龍王廟の縁起は、若い娘たちが川で洗濯をしていると、その川の側にあった桃の木から落ちてきた桃を食べた娘が身ごもり、5匹の龍を生んだという。よって、Z家村にある龍王廟は1人の「娘娘」（5匹の龍を生んだ母）と5匹の龍王を祀ったものである。これらのご神体は、「初三」（旧暦4月3日）にZ村、「初十」（旧暦4月10日）に段村、「十二」（旧暦4月12日）にLの3つの村を練り歩いてZ家村に戻ってくる。これについては、陳鳳がよく知っているということなので、いずれ詳しい話を聞いてみたい。

II. 訪問地

(1) 山西省H市Y村

9月3日(火)午前中、今回もH市水利局長の張愛国に案内していただき、H市Y村を訪問し、WBHにY村や四社五村の水利に関わる近況について聞いた後、昼食は、前回までと同様に、WBHの妻の実家の親戚が経営しているレストランで食べようと考えていたが、当日、そのレストランは休業していたので、急遽、筆者らがこれまで行ったことのないレストランで食べることになった。そのレストランにはWBHの知人も食事にきていて何人かがWBHに挨拶をしていた。もちろん、例年のように、WBH1人だけが白酒を飲んでいて、ただし、同席した妻からあまり飲まないように言われていたので、飲酒量はやや控えめだった。また、今回も昼食には元Y社首のHJHが姿を現し、同日午後、山西電視台(山西テレビ局)がHJH宅に取材に来ることになっているので、筆

者にも是非取材に応じてほしいと懇願された。そして、しばらくすると、山西電視台の取材班がレストランまでやって来て、筆者に取材に協力してほしいと依頼してきた。

こうして、HJH宅において山西電視台取材班のスタッフには、筆者がHJHと対談する様子を撮影されるとともに、筆者らが十年来にわたって四社五村を訪問している理由や四社五村の特徴などを聞かれた(写真5を参照)。事前に取材スタッフとの入念な打合せが行われ、筆者とHJHが話をしながらHJHの自宅へ入っていく様子や筆者がHJHから部屋の中で四社五村に関する様々な説明を受ける様子が演出された。それぞれの場面で何度か撮り直しがあったために、想定していた以上に時間を要し、取材が終了した時は夕方になっていた。

本来、我々は四社五村の中のC社(Q西村・Q東村)を訪問する予定だったが、HJHの求めに応じてY村のHJH宅を訪問することになった。



写真5. HJH宅で筆者等を取材する山西電視台のスタッフ

今回の山西電視台による取材は、四社五村を歴史文化遺産として残していきたいと考えているHJHにとっては、我々のような外国人の研究者が四社五村に対して強い関心を寄せているということで、格好の宣伝の機会だったと考えたのだろう。

(2) 山西省呂梁市J県J村

9月4日(水)、J村を訪問した際に、D鎮から本村の村民委員会に至る道路の補修工事が行われていた。同村民委員会の敷地のすぐ側には新たに公衆トイレが造られていた。その内部は非常にきれいだった。また、村民委員会の向かい側にあるL氏宗廟入口の側面も外壁が修繕され、その外壁には「郷村文化記憶館」「留得住青山緑水 記得住鄉愁—習近平」と記されていた(写真6を参照)。



写真6. L氏宗廟入口の外壁

午前中の聞き取りが終わって昼食を食べるために移動する前に、同村の老幹部らがH市J村《J村志》編纂委員会『J村志』（三門峽懿祥文化伝媒有限公司、2014年）とLDX珍藏本『L氏族譜』（作製年不明）（2013年7月村志編纂組収集整理、影印版）・『L氏前三門家譜』を持参して見せてくれた。そこには、自らの村に対する自信と誇りを持って積極的に我々に紹介したいという雰囲気が感じられた。

同村側から紹介されたレストランで午前中に話を聞いたL書記や同席していた老幹部らといっしょに昼食をとった。そして、同日午後は、午前中に村民委員会に顔を出していた老幹部や老人たちのうち2人の老人だけが聞き取りに応じてくれた。

(3) 山西省J鎮J村

2019年9月2日(月)、例年のように、J村のすぐ近くのホテルにチェックインした。我々が宿泊していたホテルの近くにある商店（現在のJ村の敷地内の入り口にある商店で、これまで我々が聞き取り調査者や村の幹部への土産である中国製の煙草や酒などを購入してきた）の前には、原付バイクにリヤカーを取り付けた運搬車が駐車しており、その荷台には細い木の棒が括り付けてあった。

9月5日(木)に旧J村を参観して初めて、その細い木の棒が胡桃の木から胡桃を叩き落とすために使われていたことがわかった。すなわち、この商店の住民は旧村に畑を持っており、現在でも旧村まで農作業に出かけているということである。

9月5日は、9:00にホテルを出発し、徒歩でJ村民委員会を訪ねた。その場にいた老幹部に元々のJ村を案内してもらうことになった。旧J村に至る道路は一応舗装されてはいたが、山腹の細く曲がりくねった道を徐行しながら走行していったために、旧村へ到着するまで車で約30分を要した。旧村への道路がまだ舗装されていなかった頃は、旧村から村外へ移動するのは非常に困難で、苦勞したという。

旧J村では、2019年9月現在でも依然として果樹(桃、胡桃、石榴など)・農作物(蔬菜を含む)の栽培や養鶏・牧羊などが行われていた。また、農作業を

するために、スクーター(自動二輪車)で旧村と新村の間を移動している老婦人の姿も見かけた(写真7を参照)。

多くの村民が新村から農作業をするために通っているようである。ちょうど胡桃の収穫時期に当たっており、途中の中山間地の畑では長い木の棒で胡



写真7. 旧J村

桃の木から胡桃を叩き落として収穫する作業をしていた。かつての小学校の校舎や空き家となっている民家などを見て回った。

案内してくれた老幹部に木の実や果物(石榴、桃)を食べさせられた古泉達矢と佐藤淳平はしばらくして胃腸の不調を訴えた。そして、旧村から山を下ってホテルに戻る途中の村では自家用車が何台も駐車していた。農村から都市部へ自家用車で通勤する人が多いのであろう。

(4) 甘肅省敦煌市

9月8日(日)、敦煌空港に到着すると、同飛行場は非常にこぢんまりとしており、すでにオフシーズンにさしかかっていたからであろうか、意外にも同空港の利用客もそれほど多くはなかった。ただし、同空港の前には特にタクシー乗り場も設定されていなかったのもので、いわゆる白タクで乗車料金が不明瞭で、遠回りするなどしてぼったくられるのではないかと、少し不安な気持ちを抱いていたが、全く問題はなかった。

敦煌空港からホテルまではタクシーで34元(約25分)を要した。敦煌市中心街にも信号機は非常に少なく、飛行場から移動中は全く渋滞することがなかった。

筆者らが宿泊したホテルは、敦煌市の中心地に位置する比較的高級なホテル(宿泊料金はそれほど高額ではなかった)で、陳鳳に紹介していただいた。部屋はこぎれいで、落ち着いた雰囲気があった。

筆者と古泉達矢の2人は、同ホテルの近くの麵屋で昼食を食べたが、麵屋の入り口で注文を受けていた老人は中国語(漢語)が全く理解できず、中国語のメニュー表を引出から出して麵を茹でている若い人が代わりに注文を受けてくれた。

そして、昼食後、2人で敦煌市街地を散策してみたが、高層ビルなどは全くなく、また、歩行者も少なく、いわゆる中心市街地は非常に小さいと感じた。敦煌市内最大の新華書店をはじめとして、いくつかの書店を見て回ったが、研究書はあまりなかった。そして、たまたま通りかかったところに孔子公園(最近、中国で購入した『甘肅省地図冊』中の敦煌市街地の地図には記載されていなかった)を見つけた。その公園の中には、孔子像の他に、日本の政治

家(橋本聖子)や数名の日本人が日中友好を祈念して建てられた石碑(写真8を参照)や敦煌市級文物保護単位となっていた「北台遺跡」(烽火台の一部)があった。

敦煌市内の商店では、これまで中国国内で全く見たことのない「黄河王」という銘柄の瓶ビールや「黄河啤酒」という銘柄の缶ビールが売られていた(製造地は甘粛省内の工場)。ところが、例えば、同じ「黄河王」(500ml)の瓶ビールの価格がそれぞれの商店によって5元から10元までの間で大きく異なっていた。

夕食後、「敦煌夜市」(写真9を参照)を参観した。その夜市には様々な店が軒を連ねていた。料理としては、豚肉・鶏肉・牛肉の他に、もちろん羊肉もあるが、ロバ肉やラクダ肉の料理店も非常に多かった。

9月9日(月)、9:00過ぎに事前に連絡を取ることなしに敦煌市政府を訪問した。だが、入口で守衛に誰何されることもなく、また、「登記」することを求められることもなく、簡単に同庁舎内に入ることができた。ただし、同市政府政治協商委員会弁公室を訪問したが、主任は会議に出席していて面会することはできなかった。そこで、敦煌市地方志編纂委員会編『敦煌市志(上・中・下)』(中華書局、2016年)⁶⁾を見せていただいたが、応対してくれた職員によると、市志や文史資料などの文献資料は在庫が全く無く販売していないということだった。同『敦煌市志』には敦煌には古代から「渠社」という民間の水利共同体のような組織があったことが記載されていた。

同日午前には、陳鳳が北京から案内してきた竹安栄子(京都女子大学地域連携研究センター長)・春日雅司(神戸学院大学人文学部教授)夫妻が昼前に敦煌空港に到着し(我々と同じ便である)、我々が宿泊していた同じホテルにチェックインした。昼に彼らとホテルのロビーで待ち合わせをし、彼らが前回も利用したという餃子専門店ですいしよに昼食をとった。同夫妻は、基本的には中国語を話すことはできなかった。

同日午後は、筆者を含む日本人4人が陳鳳に案内していただいて敦煌の窟院を代表する莫高窟(写真10を参照)を参観した。まず、入場券を購入する建物の向かい側に建っている建物で中国語(外国語の字幕などは一切無かった)のデモンストレーションビデオを見せられた。その内容は、漢と匈奴がかつて戦った様子や張騫が大月氏国を目指して旅するところなどを含んでいた。



写真 8. 日中友好祈念石碑



写真 9. 敦煌夜市正門入口



写真10. 敦煌莫高窟

その後、専用バスに乗車して莫高窟へ向かった。莫高窟の入り口には長蛇の列があったが、我々外国人はその列に並ぶことなく、入ることができた。莫高窟内の壁画や仏像などを写真で撮ることは許されていなかった。外国人向けガイドが石窟内を案内してくれた。莫高窟から鳴沙山月牙泉までタクシーで移動し、参観した。タクシーの運転手は、漢族で、付近の農村に住んでいるという。その村は、陸姓のみの単姓村で、陸姓は浙江省に多いという。その運転手によれば、若者は村の外に出て働いており、農業に従事しているのはやはり老人ばかりになっている。主要農産物は、葡萄・西瓜・棉花などで、食糧作物は栽培していない。主要な収入は夏の観光業に依拠しており、冬期は南方の暖かいところに遊びに行く。また、末っ子の男子が親の面倒をみるのが一般的であるという。

社会学の観点から日本農村社会とイギリス農村社会を比較研究しているという竹安・春日両教授とともに敦煌料理店で夕食をともにしながら、農村社会研究について意見交換を行った。

おわりに

これまで山西省のJ村とG村の2ヶ村における聞き取りにおいて通訳および両村幹部との連絡役を務めてきていただいた毛来靈(元山西大学外国語学院教員)の体調が極めて不良となり、今回は上記の2ヶ村における聞き取り調査を中止せざるをえなかった。今後は、J村とG村の2ヶ村における聞き取り調査を実施することは不可能であろうと思われる。

一方、今回も、H市水利局長の張愛国のご協力によってY村とJ村における聞き取り調査は極めて順調に実施することができた。次回からは、村の幹部や村民との信頼関係が構築されつつあると思われるJ村における聞き取り調査については時間と人数を拡大して実施したい。

また、陳鳳の紹介・案内によって今回が2回目の訪問となったD村では、小規模ながらやや本格的に聞き取り調査を実施することができた。だが、依然として同村の幹部や村民との間に信頼関係が構築されたとは言いがたいと思われる。次回も陳鳳のご支援とご協力を得て慎重に聞き取り調査を進めて行きたい。

なお、今後も中国において農村聞き取り調査を継続的に実施していくためには、農村の幹部や村民との間に信頼関係を構築していくことが非常に重要であることを改めて感じさせられた。

最後に、毛来靈の健康状態が一日でも早く回復されることを切に願うとともに、張愛国と陳鳳のお二人には今回の山西省農村訪問聞き取り調査が順調かつ無事に行われたことに対して衷心より感謝を申し上げたい。そして、今後ともご支援とご協力をお願いする次第である。

注

- 1) これまでに筆者が関わった華北農村訪問調査については、拙稿「華北農村訪問調査報告(1)2007年12月、山西省太原市・霍州市農村-」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)-2008年12月、山西省太原市・平遥市・霍州市の農村-」(『北陸史学』第57号、2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)-2009年12月、山西省P県の農村-」(『日本海域研究』第42号、2011年3月)・同「華北農

村訪問調査報告(4)－2010年8月,山西省P県の農村－(『金沢大学経済論集』第31巻第2号,2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月,山西省の農村－(『金沢大学経済論集』第32巻第1号,2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月,山西省の農村－(『金沢大学経済論集』第32巻第2号,2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月,山西省の農村－(『金沢大学経済論集』第33巻第1号,2012年12月)・同「華北農村訪問調査報告(8)－2013年8月,山西省の農村－(『金沢大学経済論集』第34巻第1号,2013年12月)・同「華北農村訪問調査報告(9)－2014年8月,山西省の農村－(『金沢大学経済論集』第35巻第1号,2015年1月)・同「華北農村訪問調査報告(10)－2014年9月,河北省・山東省の農村－(『金沢大学経済論集』第35巻第2号,2015年3月)・同「華北農村訪問調査報告(11)－2015年9月,河北省・山西省の農村－(『金沢大学経済論集』第36巻第2号,2016年3月)・同「華北農村訪問調査報告(12)－2016年9月,河北省・山西省の農村－(『日本海域研究』第49号,2018年3月)・同「華北農村訪問調査報告(13)－2017年9月,北京市・天津市・山西省の農村－(『日本海域研究』第50号,2019年3月)・同「華北農村訪問調査報告(14)－2018年9月,天津市・山西省－(『金沢大学経済論集』第39巻第2号,2019年3月)を参照されたい。

- 2) 祁建民・佐藤淳平(弁納才一訳)「中国内陸農村訪問調査報告(10)」(『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』第4号,2019年12月刊行予定)を参照されたい。
- 3) 霍州市賈村《賈村志》編纂委員会編『賈村志』(三門峽懿祥文化伝媒有限公司,2014年)221頁「賈村劉氏総神祇」を参照されたい。
- 4) 拙稿「華東農村訪問調査(14)－2019年3月,浙江省嘉興市の農村－(『金沢大学経済論集』第40巻第2号,2020年3月刊行予定)を参照。
- 5) 注2)に同じ。
- 6) 同書に先立って刊行された地方志として,敦煌市志編纂委員会編『敦煌市志』中華人民共和国地方志叢書(新華出版社,1994年)がある。

補記) 本稿は,科学研究費助成事業(基盤研究(B)(一般)2018年度～2022年度「社会主義経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」(研究代表者:弁納才一,課題番号18H00876)による研究成果の一部である。